

氏名	柿沼幹夫		
学位の種類	博士（学術）		
学位記番号	博文化甲第17号		
学位授与年月日	平成24年9月14日		
学位授与の要件	学位規則第3条第3項該当		
学位論文題目	弥生時代後期地域社会の考古学的研究 －北武蔵地方を中心に－		
論文審査委員	委員長	准教授	中村 大介
	委員	教授	権 純哲
	委員	准教授	一ノ瀬 俊也
	委員	准教授	井上 智勝
	委員	教授	石川 日出志（明治大学文学部）

論文内容の要旨

本博士学位論文は、日本列島において国家が成立する前段階である階層化社会の形成を検討したものである。その中でも、階層化社会形成の中心地域といえる西日本ではなく、関東地方の中央部を占める北武蔵地方、就中、荒川中流域右岸地域を主たる研究対象地域として、弥生時代中期後葉から古墳時代前期前葉における地域社会の形成と展開過程の解明を試みた。

詳細な地域単位ではその様相は異なるが、北武蔵では基本的に弥生時代中期後半には方形周溝墓と住居群がセットになる集落が形成され、灌漑水田も営まれる。しかし、こうした社会は継続せず、弥生時代中期末から後期にかけて、谷水田・畠作経営を行いながら移動・循環する集落に変質する。上位集落と下位集落といった様相もみられるようになるが、墓制から明らかな階層化は認められない。そうした社会に再び変化が訪れるのは弥生時代終末期から古墳時代初頭である。谷水田だけでは人口圧に対処しきれず、広い可耕地を対象とした灌漑水田農耕を導入して食糧増産を行う必要に迫られたため、荒川中流域右岸地域の指導者層は、先進的な知識・技術を取り入れ、自律的な意志に基づいて隣接地域との積極的な交流を図った。その結果、低地帯の開拓に成功し、食糧増産による余剰食糧の蓄積により、専門性の高い工人を招請することが可能となった。加えて、規模開拓や先進物資の入手、専門的手工業の導入に際しての政治的な利害・裁定能力や対外交渉力における長相互の人格的力量差は、集団間序列の顕現化・優位集団の固定化を明確にした。下位集団内においても上下の序列化が看取でき、ピラミッド構成をなす首長制社会の成立が、集落や墳墓の形態から読み取れるようになる。

以上のような検討を通じて、本論文では他地域からの集団を受容することで変改を行う地域社会の様相を明らかにした。同時のその内容を検討することにより、弥生時代後期社会研究の主流を占める、東日本の社会変革が全て大陸からの文物が多い西日本、特にヤマト王権の形成地である近畿地方に由来するという見解への反論及び見直しを行うことができた。その結果、北武蔵を始めとする東日本の社会が、西日本の政体の取り込まれるようなかたちではなく、自立的に地域展開するという結論に達した。

【目次】

序章

第1章 弥生時代中期後半の土器とその編年

第1節 編年論の目的とその方法

第2節 弥生時代中期後半の遺跡と土器

第3節 荒科中流域右岸地域における中期後半の土器編年

第II章 弥生時代後期の土器とその編年

第1節 荒川中流域右岸地域の後期土器を巡る研究小史

第2節 岩鼻式土器の成立と展開

第3節 吉ヶ谷式土器の成立と展開

第4節 周辺地域との交差編年

第5節 弥生土器から土師器への移行期にかかる土器編年

第III章 弥生時代中・後期の社会

第1節 弥生時代中期後葉の集落と墓地

第2節 弥生時代後期の集落と墓地

第3節 弥生時代後期の生業と祭祀

第4節 荒川中流域右岸地域における社会の変化

第IV章 古墳成立期の社会

第1節 弥生時代終末期から古墳時代前期前半期の社会変動

第2節 墳墓にみる社会の成層化

終章

引用文献

あとがき

論文審査結果の要旨

学位論文審査委員会は、当該論文の発表会を2012年8月21日に公開で開催し、著者による発表を踏まえ、質疑を行い、論文内容を審査した。当該論文は関東平野の弥生時代から古墳時代までの極めて詳細な土器編年とそれに基づく社会変化を論じたものであるため、近い地域と時代を専門とする明治大学の石川日出志氏に審査委員会に加わっていただき、埼玉大学の教員方とあわせ、論理と資料の両方から厳正に審査を行った。以下では、研究の特徴と評価点、問題点を挙げ、最後に総評を述べる。

(1)論理構成と評価点

本論文は、論文要旨をみても明らかなように、階層化社会の中核といえる西日本ではなく、関東地方の中央部を占める北武蔵地方を主たる研究対象地域としており、その検討を通じて弥生時代中期後葉から古墳時代前期前葉における地域社会の形成と展開過程の解明を試みている。本論文の主張の根幹になっているのは、「弥生時代後期社会研究の主流を占める、西日本を優位として、東日本を劣位にみる構図の再検討」であり、東日本の社会変革が全て、大陸からの文物が多い西日本、特にヤマト王権の形成地である近畿地方に由来するという見解への反論である。

上記の主張を証明するため、柿沼氏はⅠ・Ⅱ章で弥生時代中期から古墳時代への移行期に対する土器編年を行い、それをもとにⅢ章以降、集落や墓の変遷を検討した。こうした分析を通じて、日本列島の各地で展開した弥生文化は、それぞれの地域に根ざした文化的伝統や地形環境により多様であり、古墳時代初頭における階層社会の成立もヤマト王権の介在なしに自律的に行われたことを、集落変化と墓の変化、新来文物の起源、近隣地域に収まる集団変遷から具体的に実証した。

また、本論文を通じてのキーワードとして、柿沼氏は「集団再編成」を重要視している。そして、継続的に在地（土着）の人々が社会を発展させたのではなく、「弥生時代中期から後期への移行期」、「弥生時代後期から古墳時代への移行期」の二回にわたって他地域からの集団の受け入れが行われ、既存の集団が再編成されたことが、地域社会を変化させる大きな原動力であったと論じられている。つまり、北武蔵における自立的な社会変化というタームは、在地の人々が新しい文化を受容するという選択において自立的であるということ、西日本やそこを基盤としていた政体からの半ば強制的な介在ではないということ、本研究は、詳細に区分された土器系統の分析から論証を試みている。加えて、集落と墓の構成及び副葬品から検討した階層化の展開と画期についても、首長のような特定個人の社会内でも突出がみられるかどうかを基準に分析を行っており、一定の確からしさをもって論じられている。

以上のように、本論文では既存の東日本の社会展開を再構築しようとする意欲的な試み

がなされており、「弥生時代から古墳時代への社会変化の多様性」、「東日本の自立的変化」について、実証的な分析を通じて例証することに成功している。さらに、農耕以外の生業や祭祀活動の分析を加えることによって、北武蔵の独自性或いは文化的まとまりについても言及しており、総合的な文化観を提示している。このように、本論文は極めて強固な骨組みで、弥生時代後半期から古墳時代前期までの東日本の社会を論じており、この点において高く評価される。

(2)問題点

前述したように、高く評価されるべき論文ではあるが、いくつかの問題点も本研究にはみられる。まず、第一に土器編年をはじめとした分析が、考古学を専門とする研究者以外には理解が困難である点が挙げられる。土器や集落の豊富な図面を読者にとって理解を助ける面をある一方で、整理した部分が欠落すると、逆に自分で図面の解釈を行う必要が生じるため、余計に理解するのに時間がかかってしまう。もう少し分類を整理して、みやすくするなどの工夫で改善できた部分であり、今後の研究ではその点を志してほしい。

第二の問題点は本研究の全体に関わる社会発展の原動力に関する部分である。日本考古学では、単純化すると、1950～1990年代前半までの「農耕社会の展開」による指導者の権力増加から、1990年代以降の「交易ネットワーク掌握」による指導者の権力増加に、主たる社会発展モデルが変遷している。現在、多くの研究者がその統合が試みており、新たなモデルを模索している状況にある。柿沼氏は本研究において、両モデルにふれつつ、前者の意義の再評価を試みている。例えば、本論では①弥生時代中期後葉：水田農耕社会の定着、②弥生時代中期末～後期初頭：人口減少と社会の存続の危機、③弥生時代後期前葉：農耕社会の安定と人口増加、④弥生時代後期中・後葉：人口圧による谷奥への分村移住、⑤弥生時代末葉～古墳時代前期前葉：新しい農耕技術の受容と首長制社会の成立というように、農耕の展開を機軸とした段階設定を行っている。この設定自体は具体的であり、高い評価を与えられるが、交易ネットワークそのもの及び、それと農耕を含めた社会との関わりについて検討が不足している。そのため、現在の社会複雑化で意識されている二つのモデルの相互関係及び、統合に対する意識が欠如している点は否めない。この点を検討し、本研究に組み込むことができたならば、もう一段高い研究成果となったはずである。今後の課題として取り組んでいただけることを期待したい部分である。

(3)総評

上記のような問題点はあるものの、具体的な検討、論理の確かさについては、前述したように問題はなく、考古学における学位取得論文としての水準は十分に満たしている。柿沼氏は本研究提出以前に、埼玉県内の埋蔵文化財調査機関で、発掘と研究と通じて多くの資料に接してこられ、繰り返しになるようであるが、着実な土器研究を行っている。社会

論については、まとまった論考は多くなかったものの、今回の学位取得論文で大幅に追加され、自己の研究を大きく進展させている。評者はその点も高く評価したい。また、古代史を除いて、東国の社会複雑化を長いスパンで整理した研究は他になく、この点においても本研究が大きな魅力をもっていることを最後に指摘しておく。